

健康で快適な社会に貢献

日本人創業の米医薬VB

米ボストン・ストラテジクス(BSC)は、国内外の製薬・化学企業に勤めてきた北山英太社長と古屋圭三CEOが2012年に設立した医薬品事業のベンチャー。世界最大のがん治療・研究機関である米テキサス州立大学MDアンダーソンがんセンターとの提携に成功し、抗がん剤開発でPOC(医薬品の概念実証)の早期確立を可能にする体制を構築。日系企業の臨床開発を受託し、導入品の自社開発も始めた。内外のリソースを複合的に活用する「トゥルー・オープンイノベーション」を掲げ、従来の製薬企業やCRO(医薬品製造支援機関)が手がけなかった医薬品開発のパラダイムシフトを狙っている。このほど来日した北山社長にBSCの事業ビジョンを聞いた。

米ボストン・ストラテジクス

北山 英太 社長に聞く



ネットワーク活用

◇…エーザイからFLIT 3/MEK阻害剤「E6201」を導入しました。これま

で他社の前臨床・臨床開発を受託してきましたが、今後は自社で開発し製品化するということでしょうか。

患者とともに「ウイーン・ウイーン・ウイーン」

「他社の開発を受託することもあれば、自社で権利を得て製品化することもある。誰が所持しているかは重要ではなく、化合物中心、患者さん中心という考え方。優れた医薬品をいち早く患者さんに届けるための選択肢を広げる。医薬品は開発の成功率が数パーセントとされる世界。その厳しい環境のなかで、時間をかけて自社開発をするほどの余裕はない。偶然とレトのつながりが重なって生まれるネットワークを生かして医薬品を創出したい」

◇…開発資金はどのような計画です
か。
「できるだけ自己資金でやりたい。ベンチャーキャピタルのお金を使うと利益を生むことが最優先され、マネーゲームに陥る可能性がある。新薬を早く、安く患者さんに届けるために独自の判断で開発できる環境を維持したい。サブライゼンスや共同開発契約など、大手企業に権利を売るのは簡単だが、できるだけ今まになかったかたちを追求したい」

新薬を早く、安く

業ではない。
「今の医薬品開発は医療から離れすぎていると思う。お金になるもの、お金が出てくるものが作られている。BSCに所属する社員はわずか9人。それでもMDアンダーソンのような一流の研究機関でわれわれが通用しているのは、お金儲けの理論を持ち込まないからだと思っている。スポンサーとわれわれのウイーン・ウイーンではなく、患者さんを含めた『ウイーン・ウイーン・ウイーン』な関係が成立する医薬品事業を目指したい」

9人で5本の治療
◇…たん白質製造技術の「Tapboost」とは。
「製造が難しいとされる遺伝子組み換えたん白質の生産効率を大幅に向上する技術。抗体医薬やFC領域を融合したたん白質などで生産性が高まることを確認済みで、従来の製造法よりコストを大幅に削減できる可能性がある。技術開発レベルでは確立したが、まだ商業向けには応用されていないので実証実験が必要。自分たちの手持ちで技術を普及させ、資金調達のエンジンにしたい」

◇…他の開発中の状況は。
「日系中堅企業からも別の血液がん治療薬候補の臨床開発を受託するめどがたっており、年内に前期第2相臨床試験(P2試験)入りさせたい。富士ファイラムの抗がん剤3品目の開発も順調に推移しており、MDアンダーソンとの提携を活用しながら計5本の治療を9人で進める」
(聞き手 赤羽環希)